

特集

小さな集落の「奇跡」。

古民家を改修して建てられた、春日集落案内所「かたりな」。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録された後は、市外から来訪者が急増。

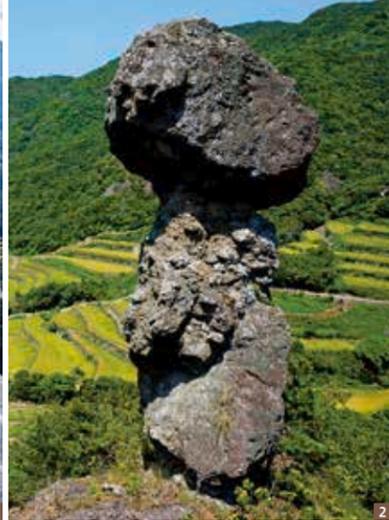
「かたりな」では、地域のおばあちゃんたちがお茶や手作りのお漬物を振る舞い来訪者をおもてなししており、ここでのふれあいは他では味わえないと好評を得ている。

玄関や縁側で来訪者と談笑する春日集落のおばあちゃんたち。気さくで素朴な人柄は、来訪者をほっこりさせる。





撮影：日暮雄一



1. 海に向かって斜面に連なる、春日集落の棚田。息を呑むような素晴らしい景観が広がる 2. 大きな岩が重なって、人の姿に似たシルエットの人形岩。倒れないのが不思議である 3. 2つの尾根に囲まれた春日集落 4. 昔ながらの石積の棚田に田植えを行う 5. 夕日が棚田を照らし幻想的な風景

「うちにはなんもなか」 ついでにないだままでは

10年ほど前は観光客が見向きもしなかった集落。そこに住む人たちも「うちにはなんもなか」と思っていた。しかし、そこには大きな「宝」が眠っていたのである。

安満岳山麓の小さな集落

安満岳の麓に位置し、その潤れることのない山からの水によって育まれた壮大な棚田が海に向かって広がり、2つの尾根に囲まれた中に住居が点在する春日集落——。

守られてきた風景

春日の棚田は、少なくとも450年以上の歴史があり、1656年の



(※1)「安満岳麓図」(松浦資料博物館所蔵)

田方帳と呼ばれる資料の中に、すでに「かめ石」や「いてのはる」「しやはり田」など、現在と同じ呼び名が見られ、広範囲で田が作られたことがわかります。また、200年後の1866年に作られた「安満岳麓図」(※1)では、現在と変わらない田や集落の姿が描かれています。

春日の人々が幾世に渡り守ってきた風景。特に棚田は集落の人たちの自慢であり、暮らして欠かすことができない大切なものです。

キリスト教との出会い

この小さな集落にも大航海時代の波が押し寄せます。1550年ポルトガル船が平戸に来航し、フランシスコ・ザビエルが平戸港周辺で布教活動を開始します。その8年後、すでに改宗していた松浦家の家臣、籠手田安経の意向で、領内はすべてキリスト教に改宗させられました。春日集落にも教会が建てられていたことが、1561年に書かれた宣教師ルイス・デ・アルメイダの手紙からわかり「教会は清潔で壮麗な場所であり、海と陸の眺望がはなはだ美しい(※2)と表現しています。やがて、幕府の禁教令により、キ

リスト教は弾圧されていきますが、春日集落は全戸が「かくれキリシタン」として信仰を継続。明治以降禁教令が解かれた後も、近年までその信仰形態を守り続けてきました。

まちづくりを真剣に考える

このほかにも多くの歴史や美しい景観を有する春日集落。しかし、そこに住む人たちにとっては、日常の当たり前のことで、それが大きな「宝」とは誰も思ってもいませんでした。

そんな中、平成22年2月に春日集落を含む「平戸島の文化的景観」が「国の重要文化的景観」に選定されます。このことが「うちにはなんもなか」と思っていた住民にとって自分たちが住む集落の価値を見直すきっかけとなり、ここから住民たちはまちづくりについて真剣に考えるようになりました。また、世界文化遺産登録を目指す「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」(平成24年当時の名称)の構成資産として春日集落が選ばれたことでさらに住民の士気は高まります。

ここから、小さな集落の「奇跡」の物語が始まるのです。

(※2) 松田毅一監訳「十六・七世紀イエズス会日本報告集第III期第1巻」(1997)より

立ち上がった

住民たちの「軌跡」

「いっちょやってみよかい」「この言葉から始まった。
「うちにはなんもなか」と思っていた住民たちは、さまざまな課題を解決しながら、自分たちが住むまちを見つめ直していった。



春日町まちづくり協議会「安満の里春日講」の役員3人。左から綾香満博副会長、寺田一男会長、寺田賢一郎事務局長

ります。当時は何の知識もなかったため、市外などに会員の皆さんを連れて柵田の視察に行ったといいます。「おばあちゃんたちも一緒に連れていったとですよ」と集落一丸となって取り組んでいきました。

「いろいろな協議の中で、活動資金の確保も課題でした。とりあえず最初に、ゴールデンウィークに地区の公民館で柵田米を販売したとですよ。また『平戸じげもん市』でも取り扱ってもらいました。その後は、市内の業者に柵田米を使ったお酒やお菓子を作ってもらい、特産品として販売していったとですよ。」

また、春日の柵田のことをより多くの人に知ってもらおうと「田植え体験」「稲刈り体験」、柵田の景観を散策する「柵田ウォーク」などの催しごとを実施し、市内外から観光客を誘客。夏休みには、福岡市にある大手進学塾「英進館」の小学生を団体で受け入れ、都会では体験することができない田んぼでの泥んこ遊びや、川遊びなど、昔ながらの遊びを経験してもらいました。

このような地道な取り組みは、着実にそして確実に春日の柵田の魅力が市内外に発信していくことになりました。

春日集落のまちづくりの取り組み



1. 柵田ウォークには市内外から多くの観光客が参加しにぎわう 2. 柵田ウォーク終了後、公民館で参加者に柵田米を使った弁当を振る舞いもてなす 3. 稲刈り体験では、親子連れが悪戦苦闘しながら作業を行う 4. 住民たちで自主的に歩道を清掃作業 5. 住民や市民の会のメンバーが協力し、ガードレールを塗装 6. 柵田ウォークの際、参加者に説明する寺田会長

数名の有志で始動

「この集落にはなんもなかばってん『いっちょやってみよかい』って立ち上げたんですよ」と話すのは、春日町まちづくり協議会「安満の里春日講」の会長である寺田一男さん。平成22年2月に「国の重要文化的景観」に選定されたのをきっかけに平成23年4月に「安満の里春日講」が立ち上がりました。

「最初は数名で準備を始めたのですが、事あるごとに集落の皆さんに声を掛けて回って話を持ちかけまし

た。男性だけだと、もてなすときにご飯の支度のできんけん女性の皆さんにもお願いしました。皆さん快く承諾してくれて、平成23年の年末には全世帯が会員になってくれたとですよ。ここから春日集落全員でのまちづくりが始まりました。

柵田を生かしたまちづくり

「やっぱ春日といえば柵田。先祖が開拓し、代々守り続けた柵田を生かしたまちづくりをせんばいかんと思っただんです」と寺田さんは振り返



寺田 一男 さん
春日町まちづくり協議会「安満の里春日講」会長
春日のまちづくりにおいて欠かすことができない人物。現在も先導役として活躍している。

「今後は、この集落を支える仲間の裾野を広げていくことが求められる」



春日のおばあちゃんに話を聞く真板氏

春日集落が世界文化遺産に登録されてから半年が経過しました。つい先日にも案内所「かたりな」を訪れ、おいしいお茶やお漬物をいただいたのですが、来訪者が地元住民の皆さんと触れ合う仕組みが確立されつつあるようで、とてもうれしく思いました。特におもてなしをするおばあ



真板 昭夫 教授
平戸市文化的景観推進委員会委員
嵯峨美術大学名誉教授

平成3年(1991)より国内外のエコツーリズムによる地域づくり調査研究を継続。平成22年(2010)から平戸市の地域づくり活動に携わる。

「春日集落の歴史や食が来訪者を呼ぶ大きな魅力になるとの考えが確信に変わったのが、平成27年に和食の天才料理人と名高い徳岡孝二氏(京都吉兆会長)と田川博己氏(株式会社JTB代表取締役会長)をお招きし、春日集落を巡った時のことでした。お昼に出されたおにぎりを食べた徳岡氏は「こんなにウマイものはない」、田川氏も「これからのお客さんはこういう体験を望むのだ」と春日の人や旬のおいしいものを絶賛してくれたのです。

春日集落は、人びとの営みや信仰の歴史など、総合的な生きているシステムが評価されて世界文化遺産になりました。今も生き続けている世界文化遺産を過去から現代にそして未来に向かってどのように継承していくのか、その主体と仕組みの確立が問われています。

人びとは変わり、社会が変わっても、変わらざるものを守り維持していく。生活を営む人びとの姿そのものが守るべき対象ならば、それをどのように支えていくのか。それは、平戸市の地域おこしの戦略をいかに打ちたて、生き生きとしたどんな地域を造っていくのかという、地域おこしの戦略と重なってくるものがあります。単に美しい棚田を見に来てもらうのではなく、来訪者がずっと関われる仕組みを造ることが大切で、今後、集落を支える仲間の裾野を広げていくことが求められています。



2人に絶賛された棚田米で握られたおにぎり



春日の魅力の発掘と発信のために作成された冊子。集落での暮らしや食材、年中行事などを四季ごとに落とし込んだカレンダーや、春日の宝の位置情報を写真付きで掲載した散策マップなどがわかりやすく記されている。この1冊で、これまでの春日の歴史や、現在の営みがすべてわかると、地元の人や観光客にも好評を得ている。



住民総出でカレンダー制作に携わる

外から見た視点でアドバイス
春日のまちづくりにおいて、もう1人重要な人物がいます。平戸市文化的景観推進委員会委員で、嵯峨美術大学名誉教授の真板昭夫氏です。真板教授は、春日集落で発見された宝(地域資源)をまちづくりに結び付けるため、まず春日の魅力を発信するための冊子、フェノロジーカレンダー(季節暦)の制作に着手。全戸にアンケートを配布し、回収したアンケートを基に、幅広い世代にヒアリングを実施。地域の自然、歴史、文化、産業など春日特有の資源を自分たちで再発見していきます。寺田会長も「春日の人たちの暮らしが季節ごとにわかるので、とてもよかもんのできた」と胸を張ります。この取り組みで「今まで日常で当

たり前だったことが、外から見たら宝になるんだ」ということがわかり「うちにはなんもなか」と思っていた春日の人たちの考えが徐々に変わっていきます。

世界文化遺産の構成資産として登録
一致団結した春日の住民は「棚田」と「かくれキリシタン」この2つを大きな軸としてまちづくりを考えるとようになります。その折「春日集落と安満岳」が世界文化遺産に登録されるのではないかと話しが持ち上がります。しかし住民の中には「ゴミのポイ捨てが増えて棚田が汚れる」「マナーを守れん人たちが来たらどうする」となどの反対意見もあり、決して全員が登録賛成というわけではなかったようです。

しかし、この機会を逃すまいと住民たちは登録推進に向けて議論を交わします。その中で「ローマ法王に棚田米を渡すことができないか」という話が出てきました。もちろん簡単なことではありませんでしたが、世界的指揮者で平戸名誉大使である西本智実さんが橋渡し役となり、2017年11月3日、バチカン市国に

おいて、コマストリ枢機卿を通じてローマ法王に春日の棚田米および法王宛の手紙などを渡すことができました。寺田会長は「まさか本当にバチカンまで行くとは思わなかったけど、直接枢機卿に手渡せてよかった」と当時を振り返ります。晴れて、昨年の7月「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産として世界文化遺産に登録されました。寺田会長は「最初は人が増えてゴミのポイ捨てや、棚田が荒らされんか心配しよったのですが、来訪者はみんなマナーがいいので、いらん心配やったですばい」と胸をなでおろします。

世界文化遺産登録後、盛り上がりを見せる春日集落には、多くの来訪者が訪れるようになり、にぎわいを見せ始めました。



バチカン市国にて、コマストリ枢機卿と



春日集落案内所「かたりな」。左棟が展示コーナーおよびお土産コーナーのある展示多目的棟。右棟がおばあちゃんたちが来場者をもてなす交流棟

究極のおもてなし 来訪者へ「真心」を込めて

春日集落の来訪者を迎える案内所「かたりな」。

地域のおばあちゃんたちが来訪者を日替わりでもてなす。

地域を知る語りべたちとの会話は、究極のエンターテイメントである。

集落の拠点施設として整備

「かたりな」は柵田やかくれキリシタンなど、春日で発見されたさまざまな「宝」を来訪者に伝えることを目的に昨年の4月にオープン。昨年の世界文化遺産登録を契機に半年で1万人以上来場するなど、来訪者を迎える拠点施設で、展示多目的棟と交流棟の2棟で構成されています。展示多目的棟は、春日オリジナルの商品や平戸の特産品などが買えるお土産コーナーと、春日の歴史を紹介する展示コーナーがあります。展示コーナーでは、春日に伝わるかくれキリシタンの納戸神(ご神体)や世界文化遺産の登録認定書などが展示されているほか、集落の暮らしや歴史がわかるビデオが放映されており、来訪者は住民の説明を受けながら見るができます。

大好評の交流棟

交流棟では、地元のおばあちゃんたちが毎日交代で来訪者を迎えて、お茶や手作りのお漬物やせんべいなどを出し、集落の暮らしについておしゃべりしています。

「お茶でも、召し上がっていかんで

貴重な文化財などを展示



オテンベンシャ(納戸神)



世界遺産登録認定書



お札(納戸神)



居心地が良過ぎて
ついつい長話

「かたりな」で来訪者と談笑する綾香クニさん。春日集落で最高齢の御年92歳。まだまだ現役で、元気に来訪者をもてなしている。



電動車いすで「かたりな」に出勤する綾香クニ子さん



感動のあまり帰り際来訪者から握手を求められることも多い

明しながら来訪者とおしゃべり。この「かたりな」のような地域のおばあちゃんたちと触れ合いながら交流できる施設は珍しく、観光ガイドの説明や、パンフレットを見るだけでは味わうことができない、地域の歴史や暮らしのことを生の声で聞くことができる貴重な場です。このような何気ない触れ合いこそ、何ごとにも変えがたい究極のエンターテインメントなのです。

おばあちゃんたちとの触れ合いは、この施設の名物となっております。来訪者から写真撮影をお願いされたり、帰り際に握手を求められるなど、お



「かたりな」の交流棟で箱火鉢を囲むおばあちゃんたち。左から綾香和枝さん(81歳)、寺田ウラさん(91歳)、綾香クニ子さん(92歳)、寺田ソノさん(92歳)

「女子講」では毎年1月15日、女性たちが「行こうか、行こうか」と皆さん民家(毎年持ち回り)に集い、観音様の掛け軸をかけて拝んだあとご馳走を食べながらおしゃべりする

春日の皆さんはみんな仲が良く、互いに助け合いながら生活しています。その中でも特に女性陣たちはとても仲間意識が強く、皆さん団結しています。春日には、昔から続く「女子講」という組織があり、集落の女性陣だけがメンバーに入っています。昔は「男子講」「キリシタン講」という組織もありましたが、現在残っているのは「女子講」だけです。

春日は女性が主役

おばあちゃんたちはさながら有名人かと見間違うぐらいの人気者です。来訪者の中には、おばあちゃんたちに会うためにリピーターになっている人や、訪れるときにお土産を持ってきたり、帰ってからお礼の手紙や似顔絵などを郵送する人も多いようです。「うれしかけん、お礼のお手紙をもらったら必ず返事を書くのですよ」と綾香クニさんは照れくさそうに話します。



手作りのお漬物やせんべいが並ぶ。来訪者にも大好評



展示スペースでは、春日の歴史を学ぶ



来訪者と記念撮影するおばあちゃんたち



春日の暮らしについて来訪者とおしゃべり

「すか」と素敵な笑顔で来訪者に声をかける綾香クニ子さん。御年92歳で週1、2回ほど出勤し、元気におもてなしをしています。「かたりな」の交流棟には、綾香さんを含め5人が毎日日替わりで出勤し、来訪者をお迎えています。

おばあちゃんたちは、お茶や手作りのお漬物、せんべいなどを振る舞い、来訪者とおしゃべりしながらおもてなししています。お漬物や、せんべいなどは皆さんで持ち寄っているそう。「来訪者の皆さんから、お茶とお漬物がおいしかと言われるのが一番うれしかし、ほっとするとですよ」と綾香クニさんは屈託のない笑顔で話します。

この手作りのお漬物やせんべいは、来訪者からは「懐かしい味がする」と大好評のようで、おばあちゃんたちも来訪者に喜んでもらおうと、真心込めて作っています。綾香クニさんは「ここに来るお客さまをお迎えすることにやりがいを感じとります」とおばあちゃんたちの活力にもつながっているようです。

また、おばあちゃんたちは皆さん昔から春日に暮らす人ばかりなので、集落を熟知する語りべとして、歴史や、暮らしのことについて丁寧に説

風習があります。

綾香和枝さんは「女子講」は男子禁制なんです。この日だけは、朝から夕方まで女性だけで自分の家のことを気にせんで、たまご酒を飲みながらワイワイしよるとです。気が知れている人たちはばかりなので、ほんと楽しかいですよ。もう、1年後が待ち遠しくてしかたなかとです」と楽しそうに教えてくれます。この「女子講」こそ、おばあちゃんたちから若い世代へと郷土料理や暮らしの知恵が代々伝承されていく、無くてはならない大切な風習なのです。

積極的な商品開発

まちづくり活動は美談ではなく現



寺田 賢一郎 さん
春日町まちづくり協議会「安満の里春日講」事務局長

実であり、継続していくためには活動資金が必要です。資金がないと活動自体ができなくなります。安満の里春日講では、棚田米を使った商品開発に積極的に取り組みました。安満の里春日講の事務局長を務める寺田賢一郎さんは「かたりなで販売する棚田米のほかに、お酒やかんころ餅用の米も確保せんといかん」とですよ」と話します。加工品を売ると集落にお金が落ちますが、販路を広げれば材料となる棚田米の確保が必要になります。それでも「まちづくり活動を続けるためには棚田米を使った商品売ることが大切」だといひます。棚田という「宝」を守るには、その「宝」を活用し、地域に何らかの利益をもたらす仕組みを作らなくてはなりません。「美しい棚田だから守ろう」「世界文化遺産に登録されたから守らなくてはならない」という考えではいつか維持できなくなってしまう恐れがあります。春日集落では「かたりな」で春日の棚田米を使った商品を売ることができ、次の3つの効果が出ているようです。

①活動資金を得る手段ができた
イベントや、除草作業を行う時にもさまざまな経費がかかります。活動

資金を確保することで、これまでボランティアでやってきた活動にお金を回すことができ、今後、より効果的で幅のある取り組みになっていく可能性ががあります。
②町の誇りにつながる
「春日」という名前が入った商品がお店に置かれることは住民の皆さんにとってはうれしく、また誇りになります。また、それをお土産に買って帰る人たちがたくさんいて、新聞やSNSなどでも取り上げられればなおさらです。自分のまちに誇りを持つことは、まちに対する愛着や共

感などの意識を高めていくうえでも大切なことなのです。
③棚田の保全に直結している
棚田を守るといことは、そこで米が作り続けられるということです。棚田で米を作り、棚田米が消費されていく状況を作り続けることが必要であり、それが景観の保全につながります。
美しいから棚田を守るのではなく、棚田米が売れる状況と環境を整備した結果が、美しい棚田が維持されるという流れが大切で、その仕組みをつくる必要があります。



展示多目的棟のお土産コーナーではさまざまな商品が並ぶ

春日の棚田米を使ったオリジナル商品も充実



春日で採れた棚田米 フィランド(日本酒) かんころ餅



綾香 和枝 さん

「かたりな」には週2回ほど出ているという綾香さん。その屈託のない笑顔で、来訪者をおもてなししている。



バスが見えなくなるまで来訪者を見送る綾香さん。

「ここでおもてなしをすることは

生きがいであり、第2の人生のよう」

この集落は人に見ていただくようなものはないなかなと思ってきました。10年ほど前に寺田会長から春日講の話がされたときも、まさかこういう日が来るとは夢にも思つたらんやっただです。

私は、ここには週2回ほど出て、1人でお客さんにお茶を出したりしています。多いときには1度に40人の団体のお客さんが来るとですが、この棟には入らんけん、二手に分け

て入ってもらいよとです。それでも1度に20人にお茶を出すので、そのときはさすがに大変かですね。

ばってん、お客さんとここで話ばしよると張り合いが出て、一生懸命頑張っていきたいと思えるようになってきたとです。生きがいになつて、第2の人生を歩んでいるよう。

これからも、できるかぎり皆さんをおもてなしできると、頑張っていきたかですね。

来訪者に聞く「かたりな」の魅力



伊藤 恒紀 さん (福岡市)

「生の声で話しが聞けて、いい経験になりました」

私は、転勤が多く出身は秋田なのですが、去年から福岡に住んでおり、平戸には12年前に1度来たことがあります。今回は世界文化遺産に登録された地域を回ろうということで、普通の旅行では行けないような場所に行こうと思い春日集落を訪れました。

ここでは、おばあちゃんたちから春日の歴史や、かくれキリシタンの話などを生の声で聞くことができますので、すごくいい経験ができました。



高木 令子 さん (福岡市)

「この集落を知るうえで、欠かせない場所ですね」

「ひらめまつり」をやっているということで、はじめて平戸に来ました。ずっと行きたいと思っていたのですが、海や棚田の風景がすごくきれいでビックリしました。

かたりなでは、ビデオが上映され、地元の人が説明しながら見る事ができるので、わかりやすく歴史を知ることができました。ここはこの集落を知るうえで欠かせない場所だと思います。

「まだまだこれからばい」 まちづくりの終わりはない

世界文化遺産登録という「奇跡」。

10年ほど前は、こんなに多くの人が集落を訪れると誰が想像しただろうか。小さな集落の住民たちによる希望ある未来へ向かった「軌跡」は、まだまだ続いていく。



山口さん一家

左から
善作さん(69歳)、みつ子さん(62歳)、和美さん(45歳)
惺矢くん(5歳)、芳明さん(41歳)

春日に三世代で暮らす山口さん一家。春日で三世代で暮らすのは2世帯のみ。

「春日は、台風は来るけど地震も水害もほとんどなく、田舎ばってんほんと住みやすかところですよ」と話してくれたのは、山口さん一家の祖父、善作さん。春日に三世代で住む数少ない家族です。

春日のいいところを聞くと、「この集落は、近所付き合いが他のところと比べてもすごく近かいですよ。しょっちゅう収穫した野菜や米はもらったりします。うちは嫁さんが海女なんけん、お礼にサザエじゃアワビばやりよとですよ。持ちつ持たれつの関係って言うことですかね。ばつてん肉だけはもらったことなかね」と善作さんは笑いながら教えてくれます。

しかし子育てには若干悩みがあるようで、芳明さんは「この集落には小さい子どもが少なけん、遊び相手がおらんで、保育園から家に帰ってきたらじいちゃんとか遊びでいます。息子は少し寂しかとじやなかかって思うとです。けど、近所の人たちはみんな知り合いけん、安心して子育てはできます」と話すそ

「春日はほんと住みやすかところですよ」



家の前の棚田がライトアップ

の横で元気に遊ぶ惺矢くん。「元気の良すぎて困つとるとですよ」。親の心配をよそにすくすく育っているようです。

最近はうれしいことがあったようで「昨年の11月ごろから2カ月間、うちの前の棚田がライトアップされたんですけど、きれいで最高やったです。お客さんにもいっぱい来てもらい、よかイベントやったです」と善作さんの顔はほころびます。

「この生活は何の心配もなけん、全くストレスもなく過ごしとります。今は夕方の6時30分ごろには寝よるとですよ」。この善作さんの言葉が、ゆったりと時が流れる春日の素晴らしさを物語っています。

議論がまちを活性化

10年ほど前までは「うちにはなんもなか」と思っていた春日の人たち。外部の力を借りながらも、まちづくりを進めてきた結果、今では多くの来訪者でにぎわいをみせています。

まちが活性化するには、単に道や建物が整備されることだけじゃなく、そこに住む人たちがみんながまちづくりの目標に向かって常に議論を続けることが重要です。春日は20世帯しかありませんが、少ない中でも皆さんがまちづくりに対し、真摯に議

論を続けてきた結果がこのような「奇跡」を起こすことができたのです。これまでの春日の「軌跡」こそが誰も想像できなかった「奇跡」につながっていきました。

春日にはいろんな「宝」がありますが、本当の「宝」は春日に住む人たちそのものではないでしょうか。

まちづくりに終わりはない

人口減少時代に突入している現在、その大きな波には逆らえません。人が減っていくのなら、来訪者を自分たちの仲間の一員として巻き込み、まちづくりを進めていくことを考えていく必要があります。今の時代にどのような価値観(魅力)を発揮できるかを考え、小さくてもまちに何らかの利益を生み続ける活動を行うことが大切です。

まちづくりには終わりはありません。春日の人たちは、今後もみんな議論しながら自分たちが望む未来への糸を紡いでいきます。

小さな集落の「軌跡」はこれからも続きます。「今後も、いろいろ考えていきたかですね。まだまだこれからばい」。この寺田会長の言葉に春日の未来が詰まっています。

